

外国語教育における会話活動を通じた、中学生のコミュニケーション意識の変容 ～英会話コンテスト出場者へのアンケート分析を通じて～

遠藤 忍（慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科）

1. はじめに

日本の学校外国語教育は、ここ20年ほど、コミュニケーションを重視する方針をとってきた。現行の中学校学習指導要領の教科・外国語においては、その目標として「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」と「コミュニケーション能力の基礎」を養うことを掲げている。しかし実際は、「コミュニケーション」と「英会話」が混同される傾向にある。言語使用の基盤となる、他者とコミュニケーションをとろうとする積極性や、コミュニケーション方略への意識を育む実践は難しいと言える。

本研究では、この「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」と「コミュニケーション能力の基礎」に着目し、外国語教育における会話活動を通じて、学習者のコミュニケーションに対する意識がどのように変容するかを特定することを試みる。外国語教育における会話活動の事例として、茨城県で全県的に実施されている「英語インタラクティブフォーラム」という取り組みを取り上げ、これに参加した中学生を対象に、コミュニケーションに対する態度や意識について質問紙調査を行った。本発表では、この結果に基づいて、外国語教育において会話活動を通じて、学習者のコミュニケーション意識を、より基盤的なものに向けることの可能性と必要性について考察したい。

2. 研究対象と先行研究

2.1. 「英語インタラクティブフォーラム」の取り組み

本研究で事例として取り扱う「英語インタラクティブフォーラム¹」は、茨城県教育委員会他の主催によって行われる全県的な取り組みである。スピーチコンテストと異なり、双方向的なコミュニケーションを評価するものとして、過去10年以上実施されてきており、県内の公立中学校はほぼ全校が参加している²。

中学生の部において出場資格を持つのは、中学2年・3年生であり、各学校から選出された代表生徒が、市内大会、地区大会と勝ち進み、毎年8月に実施される県大会の出場を目指す。いずれの大会も、学年別にランダムに組み合わされた3～4人のグループで、与えられたテーマに関して自由に会話を行うという形式

がとられている。原稿を手にすることはできないのはおろか、誰とグループを組むかは当日まで分からないため、初対面の状況で会話をすることが求められる。

開催要綱によると、I.E.F.は「英語を使って双方向性を重視したコミュニケーション能力を高め」ることを目的としている。そのため、「表現力(通じやすさ、自然さ、正確さ)」「豊かで適切な内容」「協調性のある親しみやすい態度」が審査項目として設定されており、これらについて「グループ全体のパフォーマンスに個人のパフォーマンスを加味して」点数が付与される。

2.2. I.E.F.に関する記述的先行研究

長澤・田邊(2001)では、I.E.F.の開始の経緯や審査項目に関する検討、および初回である1999年県大会の観察がなされている。それによると、I.E.F.の審査項目は、「コミュニケーションの関心・意欲・態度」と密接な関連性があり、同様にさまざまな方略を用いることや社会言語的正確さと密接な関連性があると指摘されている。その上で、今後の指導の手だてとして、談話規則・コメントや質問・言語機能・コミュニケーションストラテジーの重要性が指摘されている。これは、I.E.F.がコミュニケーション能力の4分類(Canale and Swain, 1980; Canale, 1983)のなかでも特に「方略的能力」を重視していることを示している。

ここから、I.E.F.の期待される効果としては、学習指導要領中の「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」と「コミュニケーション能力の基礎」を養うことを挙げることができる。つまり、I.E.F.とそれに至るまでの練習過程を通じて、他者とのコミュニケーションに対する意識の変容が期待できる。しかし、先行研究は大会の観察にとどまっており、実証的に変容を分析した研究は見当たらない。

2.3. 動機づけ理論に基づくI.E.F.の説明

前述のI.E.F.の期待される効果について、コミュニケーションに対する意欲の高まりという点から説明するために、学習の動機づけ研究の理論を援用したい。

Deci & Ryan(1985)の「自己決定理論」に基づく内発的動機づけの研究においては、動機づけを高める前提

¹ Interactive English Forum, 以下特に指定がない限り、I.E.F.と省略して明記する。

² 大会には中学校の部、高等学校の部が存在するが、本研究では中学校の部を取り上げる。

条件として、「自律性」・「有能性」・「関係性」の、3つの心理的欲求が充足されることが必要であると指摘されている(廣森, 2005; 田中, 2009). 廣森(2005)および田中(2009)から、日本人の英語学習者の動機づけを高める上では、有能性と関係性の欲求が特に重視されていることが伺える。

一方、市川(2001)の「二要因モデル理論」では、学習者の動機づけを、「学習内容の重要性」と「学習の功利性」という2軸によって、6つの学習動機が分類している。それぞれ、「充実」・「訓練」・「実用」の3志向が「内容関与的動機」とされ、「関係」・「自尊」・「報酬」の3志向が「内容分離的動機」とされている。

I.E.F.は、「自己決定理論」の3つの心理的欲求を満たす取り組みであると言える。また参加者の参加動機を「二要因モデル理論」から考えると、「内容関与的動機」との関連が高いと言える。よって本研究では、「自律性」・「有能性」・「関係性」の3欲求、および「内容関与的動機」の3志向を参考に、以下に述べる質問紙調査を設計した。

3. 調査方法

本研究では、2010年7月5日に実施された、I.E.F.古河市内大会に出場した生徒を対象として、I.E.F.そのもの、および日常のコミュニケーションに関する意識についての質問紙調査を実施した。市内大会は、各校の代表が最初に出場する大会であり、9つの中学校から3名ずつ、計54名が出場した。

質問紙調査の設計にあたっては、田中(2009)を参考にした。第一に、調査時点を3回とした。これは、動機

づけの変容を事前・事後の2時点でのみ捉えるべきではないという主張を参考にすると同時に、参加する生徒の内省を促すという観点から、大会を中心に、事前(1ヶ月前)・直後(当日)・事後(3ヶ月後)の3時点とした。第二に、各設問に対して質的分析を行うためのコメント欄をつけた。これは、回答する生徒たちの負担を考慮して設問数を多く設定しない分、統計的分析を補う意味で採用した。

その上で、自由記述欄をつけた6件法による設問を、I.E.F.に関する動機づけ6問、日常のコミュニケーションへの動機づけ6問を作成した。また、各時点における生徒のI.E.F.に対する意識を問うため、毎回4つの自由記述式設問を設定し、裏面に記述した。各回の実施時期を考慮し、事前においては参加のきっかけや練習に対する取り組みについて、直後では当日のパフォーマンスの振り返り、事後では練習から本番にかけての取り組み全体の振り返りを、設問の構成要素とした。質問項目は、表1に示した通りである。

4. 結果と考察

今回の調査で対象とする生徒54名中、3回分のデータをすべて集めることができた42名分のデータを分析した。なお、各回の質問紙は個人にひもづけられて回収されている。

4.1. 量的分析の結果と考察

数値で答える設問については、まず記述統計量を産出し、次に対応のある一要因分散分析によって、各設問の回答の時点間の平均値の変容を分析した。その結

表1. 質問紙の設問項目

I.E.F.やコミュニケーションに対する動機づけに関する設問	
I.E.F.に対する動機づけ	日常でのコミュニケーションへの動機づけ
1-1 I.E.F.の活動では、自分から積極的に会話に参加したい(できた).	2-1 人と会話をするとき、自分の好きなことを話したり聞いたりできると思う。
1-2 I.E.F.の活動では、自分に自信を持って会話をした(できた).	2-2 相手に自分の話をしたり、相手の話を聞いたりするとうれしいと感じる。
1-3 I.E.F.を通じて、友人や見知らぬ人と仲良くなりた(なれた).	2-3 会話することを通じて、いろいろな人と仲良くなることができると思う。
1-4 I.E.F.の活動は楽しい(かった).	2-4 人と会話することが好きだ。
1-5 I.E.F.では、会話の仕方を身につけたい(ついた).	2-5 いろいろな人と会話をすることで、会話の仕方や能力が身に付くと思う。
1-6 I.E.F.の活動は役に立つと思う(立った).	2-6 他人とうまく会話できると日常生活や将来に役立つと思う。
I.E.F.に対する意識を問う自由記述設問	
・事前調査	
1. I.E.F.の活動に参加するきっかけはなんですか? なぜ参加しようと思いましたか?	
2. I.E.F.の活動に参加してどんなことができるようになると思いますか? どんなことができるようになりたいですか?	
3. I.E.F.の本番に向けて、どのような練習や対策を行っていますか?	
4. I.E.F.の本番に向けて、自分で心がけていることはありますか? また、自分で気をつけたいと思う所はありますか?	
・直後調査	
1. 今日のI.E.F.で、「うまくいった!」「こんなことができた!」とうれしく思うことはなんですか? どうして「うまくいった」「できた」と思いますか?	
2. 今日のI.E.F.で、「失敗しちゃった」「うまくできなかった」と悔しく思うことはなんですか? それらは、どうすれば防げたと思いますか?	
3. 今日のI.E.F.の大会に参加して、良かったと思いますか? 良くなかったと思いますか? どのようなことが良かった/良くなかったと思いますか?	
4. 今日のI.E.F.の大会に参加して、何か新しいことに気付いたり、学んだりしたことがあったら、教えてください。	
・事後調査	
1. I.E.F.の本番と練習を通じて、人と会話をする時に、どんなことに気をつけていましたか?	
2. I.E.F.の活動を通じて、どんなことを学んだり、得ることができたと思いますか?	
3. I.E.F.に参加して良かったと思いますか? どうしてそう思いますか? 理由も聞かせてください。	
4. I.E.F.に取り組む前の自分と、今の自分を比べてみて、何か違いを感じていますか?	

果をグラフに表したものが、図1と図2である。

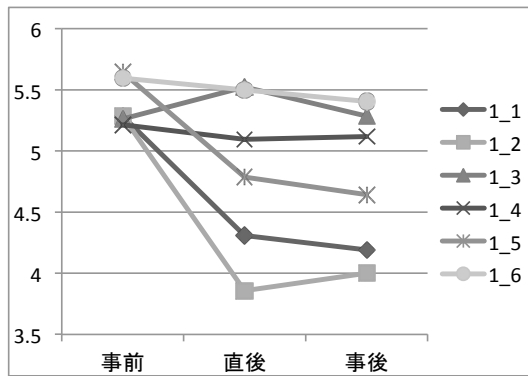


図1. I.E.F.に対する動機づけに関する設問の平均値変化量

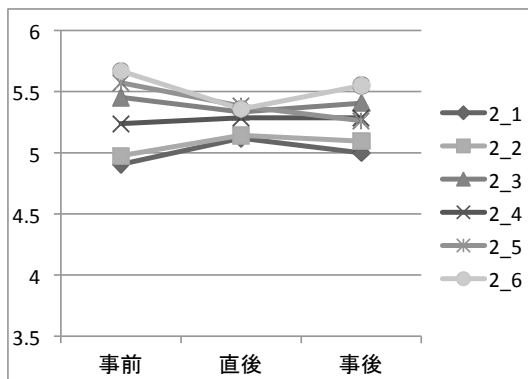


図2. 日常でのコミュニケーションへの動機づけに関する設問の平均値変化量

まず、ほとんどの設問において、回答の平均値が4を上回っていた。このことから、I.E.F.に出場する生徒の動機づけは、ほぼ全ての時点において高いものであったと推察できる。もともと高動機である生徒の動機づけは、大会を経て維持されていると言える。

各設問の時点間の平均値の差については、以下の3つの設問について、事前-直後間および事前-事後間の平均値が有意に下がっていることが分かった。

- 1-1: $F(2, 41) = 21.08, p < 0.001 [5.29 / 4.31 / 4.19]$
- 1-2: $F(2, 41) = 28.05, p < 0.001 [5.29 / 3.86 / 4.00]$
- 1-5: $F(2, 41) = 26.45, p < 0.001 [5.64 / 4.79 / 4.64]$

それ以外の設問、特に「日常でのコミュニケーションへの動機づけ」の設問については全てにおいて、各時点間の平均値に有意差は見られなかった。

このことから、市内大会に参加した生徒たちは、事前調査における期待に反して、本番では積極性や自信をもって会話することができなかったと考えており、また会話の仕方を身につけることができなかったと意識していたと推察できる。それに対し、日常のコミュニケーションに対する意識は、I.E.F.の取り組み

を経る前から高い状態にあり、これが維持されたということが分かる。

4.2. 質的分析の結果

自由記述方式の設問については、まずKJ法(川喜田, 1967)を参考に、各設問ごとの解答を整理し、設問ごとにその内容を検討した。まず、I.E.F.やコミュニケーションに対する動機づけに関する設問のコメントを整理すると以下のことが分かった。

- 出場する生徒は、英語に対する動機づけが高い一方、I.E.F.に対する動機づけを高める要因としては、他校の生徒と仲良くなりたい、試験や学校の勉強に役に立つ、という意識が挙げられた。
- I.E.F.に参加する生徒は、日常会話についても苦手意識を持つことが少なく、苦手意識を持っている生徒でも、積極的に自分の苦手をなくそうと意識しており、総じて、他者と話すことを楽しんでいた。
- I.E.F.当日のパフォーマンスにおいては、自信や積極性を充分発揮できなかったと意識している。一方でほぼ全員が、他校の生徒の関わりを持てたことに対する充実感を持っていた。
- I.E.F.の取り組みを通じて生徒たちは、コミュニケーション(相互に表現し理解すること)が重要であると意識し、その成功体験にうれしさを感じるようになった。つまり、英語という言語に限定せず、コミュニケーションを捉えるようになったと言える。

次に、I.E.F.に対する意識を問う自由記述設問のコメントを整理すると、以下のことが分かった。

- 全体的に英語に関する言及がみられたが、文法や形式の知識よりも、英語に対する意欲や態度が高まったとする言及が多かった。一方、I.E.F.の反省として、言いたいことを上手く表現できなかったり会話に詰まってしまったりするなど、会話の持続の難しさを感じていた。
- 人と会話をする上で重要なこととして、身体的な方略と態度的な方略が認知されていた。身体レベルの方略は、アイコンタクトや相手の顔を見ること、声量、笑顔を示すことなどである。態度レベルの方略は、人の話をしっかり聞いたり、人の話を引き出すための配慮をしたり、自分の言いたいことをはっきり言ったりすることなどである。
- I.E.F.に参加したことによる成果として、他校の生徒との関わりが持てたことが挙げられていた。このことから、I.E.F.において生徒の動機づけを高める

要因として、関係性の欲求の充足が挙げられると言える。

5. 結論

本研究では、外国語教育における会話活動を通じて、学習者のコミュニケーションに対する意識がどのように変容するかを特定することを試みた。その事例として「英語インタラクティブフォーラム」を取り上げ、これに出場した生徒たちへの質問紙を通じてコミュニケーションに対する態度や意識を調査した。その結果としては、以下の2つのことが導かれた。

- ・生徒たちは、英語そのものに対する気づきだけでなく、アイコンタクトや表情、相手の話を聞くなどの配慮、そして積極性など外言語的な方略に対する気づきを得ていた。
- ・生徒たちは、他者とのコミュニケーションに対して、充実感や楽しさ、重要性、また言いたいことが言えないという体験を通じてその難しさを感じていた。

以上のことから、出場した生徒たちの意識・動機づけは、I.E.F.という会話活動を通じて、英語という言語に対するものから、より広範で基盤的なコミュニケーションに対する意識に変容したということが伺える。この知見は、外国語教育の目的に、言語使用における基盤となるコミュニケーション能力の育成という、新たな側面を加える点で意義があるものと考えられる。

外国語を学習する意義には様々な要素があるが、自分たちが日頃から使っている言語とは異なる外国語を学ぶことで、日頃のコミュニケーション行為を相対化するメタ言語意識を働かせ、コミュニケーションに対する意欲や態度を高めること可能となる。「コミュニケーション能力」が求められる現代において、意味のやりとりを重視した、対面の会話による学習活動を取り入れていくことで他者との接触場面を数多く持つことができるようになるだろう。しかも、I.E.F.のような取り組みは、単に楽しいだけでなく、うまくいかなかったり失敗したりしながらコミュニケーション体験を行っていく活動であると言える。この、成功体験ばかりではない、失敗体験も味わいながら、コミュニケーションに対する態度と、やりとりにおける方略を身につけていくことが必要であると言えるだろう。

謝辞

本研究における質問紙調査は、茨城県古河市英語教育研究部会の谷津光男会長はじめ部会員の先生方、および茨城県古河市教育委員会指導主事の前田隆浩先生のご協力の基に行われた。

参考文献

- Canale, M. (1983). Form communicative competence to communicative language pedagogy. In J. C. Richards, & R. W. Schmidt (Eds.), *Language and communication*. New York: Longman.
- Canale, M., & Swain, M. (1980). Theoretical basis of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics*, 1(1), 1-47.
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.
- 川喜田 二郎. (1967). 発想法：創造性開発のために. 中央公論社.
- 市川 伸一. (2001). 学ぶ意欲の心理学. PHP研究所.
- 廣森 友人. (2005). 外国語学習者の動機づけを高める3つの要因：全体傾向と個人差の観点から. 大学英語教育学会紀要, 41, 37-50.
- 田中 博晃. (2009). 3つのレベルの内発的動機づけを高める-動機づけを高める方略の効果検証. *JALT Journal*, 31(2), 227-250.
- 長澤 邦紘・田邊 一男. (2001). Interactive english forum 1999:茨城県における実践的コミュニケーション能力育成の試み(その1). 茨城大学教育学部紀要.教育科学, 50, 129-144.
- 長澤 邦紘・田邊 一男. (2001). Interactive english forum 1999:茨城県における実践的コミュニケーション能力育成の試み(その2). 茨城大学教育学部紀要.教育科学, 50, 145-158.

連絡先

遠藤 忍 (えんどう し のぶ)

※慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科

Mail: enshino@sfc.keio.ac.jp

Web: <http://enshino.biz/>